2022 年度　ふじみ　歳時記

はる

板橋富士見幼稚園幼児教育センター長
鍋島　惠美

コロナ禍で皆さんを招聘して、園内研究会を再開されたのも 3 年ぶりとの話を聞く。私自身は、2018 年度から 2021 年度まで保育園の開園と共に運営に携わっていて京都から一歩も外に出ない生活をしていた。今年度初めて、東京に行く機会をいただき皆さんと共に学びあうことになった。幼稚園・養成校・保育園という生活の基盤が変化していく中で、自分自身の感性がどのようにひらかれるのか、再び訪れることができる板橋富士見幼稚園。楽しみな参観である。ふっと目にしていいなぁ‥と思った瞬間のきもちをあるがまま言葉にしていきたいと思う。

第 1 回園内研究会のテーマ「幼児主体の対話的学びを支える教師の関わり」とあるので、あえて「対話」という言葉をキーワードにして考えたい。

クラスの保育室内の朝の様子。先生の話をみんなで聞いたり、互いに対話したりする環境は、クラスの年齢や先生の考えで室内空間を机やいすなどで構成されている。先生の横で背を向けているこどもがいる。よく見てみると、背中で聞いているようにも感じる。先生がその子も許容して話しているのが自然な感じで伝わる。二人で楽しそうに対話するこどもがいる。集団の中の対話と個々の対話の時間が共存している。

今日は、大雨の日。大きな雨音が聞こえる。こどもはどう感じているのかと思う。テラスの屋根からトユへはみ出す水が落ちる勢いと、その流れ落ちるさまが美しい。雨音の凄さを耳に感じ流れ落ちる雨をこどもは、受け止めようと腕を目いっぱい伸ばしている。上半身を前のめりに腕をぐっと差し出しているこどももいる。そこに落ちる雨の勢いを体に感じているであろうと思う。する加減、感じる加減[i]だろうと思う。この加減感覚が自然との対話を通して身についていくことが大事なこどもの原体験になる。しばらくすると、あるこどもは、保育室から紙箱を持ち出して雨水をニヤニヤしつつ受けだした。プラスチック容器で受けとめる手に伝わる感覚とは違うであろうと思う。

（文責　鍋島惠美）

---

[i]保育の質とは何か「加減」に着目しこどもの行為の質を問う共同研究:2017 の第 6 弾「加減」を「する加減」「感じる加減」に着目しこども理解を深める共同研究:2022